

オリンピック日本代表選手団開会式用 ユニフォームの歴史—日の丸カラーの系譜を中心に

安城寿子（阪南大学流通学部講師）

A brief history of opening ceremony uniforms for the Japanese Olympic Team: the changing design and the colors of the “Sun-Mark Flag”

Hisako ANJO
Lecturer, Han'nan University

The uniforms worn by athletes in the opening ceremony of the Olympic Games are a key element that adds grace to the worldwide sports event that is held every four years. Since there are both Winter Olympics and Summer Olympics, new uniforms for the opening ceremony are created every two years. However, it cannot be said that the history of the uniforms has been fully revealed.

In Japan, few attempts have been made to trace the history of the opening ceremony uniforms for Japanese Olympic teams, using historical materials. My book titled “1964 Tokyo Gorin Uniform no Nazo: Kesareta Rekishi to Taiyo no Aka” (literally translated as The Mystery of the 1964 Tokyo Olympic Uniforms: Erased History and ‘Red Sun’ Mark) (2019) and the paper I contributed to “The Bulletin of Society for Changing Customs in Contemporary Japan” are probably the only studies of this kind, but neither of them fully covers the history of the Olympic opening ceremony uniforms.

At the same time, there are concerns about the spread of popular beliefs because misinformation is often included in the special feature articles about Olympic uniforms published by fashion magazines. This paper presents a brief history of opening ceremony uniforms for Japanese Olympic teams from the beginning to the present, based on the results of the research I have made thus far.

1…………はじめに

4年に一度のオリンピックに花を添えるものの一つに開会式用ユニフォームがある(註1)。民族衣装を含む様々なデザインのユニフォームで行進をする各国選手団。それを楽しみに開会式の中継を見るという人も少なくないだろう。記憶に新しいところでは、2016年のリオデジャネイロ大会において、ステラ・マッカートニーやクリスチャン・ルブタンといった気鋭のファッションデザイナーの手がけた開会式用ユニフォームがSNSで話題を集めていた(註2)。

冬季オリンピックも含めると、2年に一度新しい開会式用ユニフォームが誕生しているわけだが(註3)、話題性のわりに、その歴史は決して十分に明らかにされてきたとは言えない。日本について言えば、オリンピック日本代表選手団の開会式用ユニフォームの変遷を史料の検証とともにたどる試みは、拙著『1964 東京五輪ユニフォームの謎：消された歴史と太陽の赤』(2019年)とそれに先立って『現代風俗学研究』に寄稿した論文「五輪ユニフォーム考：2000年シドニーオリンピックの虹色マントをめぐる」くらいのもので(註4)、これらも全てを網羅しているわけではない。一方、オリンピックの開催に合わせてファッション雑誌等で組まれる五輪ユニフォーム特集には誤りが多く、今年も、7月に東京大会の開幕を控えているだけに、そうした俗説の流布が懸念される。オリンピック日本代表選手団の開会式用ユニフォームはどのような変遷を経て現在に至っているのだろうか。本稿では、いわゆる「日の丸カラー」の開会式用のユニフォームの誕生、継承、中断、そして復活を中心に、あらためてその歴史をたどってみたい。

2…………オリンピックと開会式用ユニフォーム

手始めに、オリンピックの開会式用ユニフォームがいつ頃から身に着けられるようになったのかを確認しよう。ピエール・ド・クーベルタン [1863-1937] が提唱した近代オリンピックの歴史は、オリンピック発祥の地であるアテネで第1回大会が開催された1896年にまでさかのぼる。しかし、各国選手団がおそろいの開会式用ユニフォームで行進するのが当たり前の光景になるのは、1920年代より後のことで、それ以前は、競技用ユニフォームのまま開会式に臨む国が少なかった。一例として、1908年のロンドン大会の開会式におけるイギリス選手団の写真をみると、その服装は競技種目によって異なり、雑然とした印象である(註5)。ちなみに、日本選手団も、オリンピック初参加を果たした1912年のストックホルム大会の開会式では、陸上競技のユニフォームである半ズボンという出で立ちだっ

た。各国選手団の間で開会式用ユニフォームの着用が一般化したのは、おそらく、1920年代以降、オリンピックの開会式が独立した一つのイベントとして重要な位置を占めるようになったためだろう。開会式のプログラムは、入場行進、開会宣言、オリンピック旗掲揚、オリンピック宣誓などによって構成されるが、1928年のアムステルダム大会以降、オリンピック開催の象徴として聖火点灯が行われるようになり、その演出一つ取っても、次第に大がかりなものになっていった(註6)。そして、それにともない、一度きりの歴史的瞬間を目撃しようとスタジアムを訪れる人々の数も増えていった(註7)。こうした開会式そのものの変容を背景として、各国選手団が威儀を正して開会式に臨むための特別な装いが必要になったことは想像に難くない。

ここで、競技用ユニフォームと開会式用ユニフォームの違いについて考えてみたい。言うまでもないことだが、競技用ユニフォームにおいては、第一に、競技に適した機能性が求められる。フォームは選手の身体能力を最大限に引き出すよう計算され、可動性を低下させたり空気抵抗(水中競技であれば水の抵抗)が大きくなったりするような要素は極力排除される。視覚的な美しさが重視されるかに思われるシンクロナイズドスイミングやフィギュアスケートの衣裳ですらその例外ではない。意匠はあくまで二の次なのだ。こうした競技用ウェアが本質として備える機能性の優越に加えて、オリンピックやワールドカップなどの競技大会では、各競技連盟が定めるレギュレーションによって、意匠の自由の範囲はさらに限られてくる。一方、言うまでもないことだが、開会式用ユニフォームにおいてそこまで機能性が追求されることはない。レギュレーションの縛りも皆無である。開会式用ユニフォームは、オリンピックというスポーツの祭典で身に着けられるユニフォームの中でも、自由な意匠表現が許される数少ない例外の一つと言える。

そのような自由が許される限られた機会に何を表現するのかと言えば、多くの国は、その国の「らしさ」を表現すべく、何かしら象徴的な意味を持つ意匠を取り入れている。大別すると、①国旗の意匠 ②オランダのオレンジのように(註8)、その国の成り立ちと深い関わりのある色 ③民族衣装あるいは民族衣装的な要素のいずれかを選択している場合が多い。

各国選手団の開会式用ユニフォームの決定権はその国のオリンピック委員会(NOC)にある。デザインの決定や生産に至るプロセスは国によって異なる(註9)。また、近年では、ポロ・ラルフローレン(アメリカ)、エンポリオ・アルマーニ(イタリア)、ラコステ(フランス)、H&M(スウェーデン)などが自国の開会式用ユニフォームを手がけているが、開会式用ユニフォームのデザインと生産あるいはそのいずれかを外国のデザイナーやメーカーに依頼する国も少なくはない。一例として、1992年のバルセロナ大会におけるリトアニア選手団の開会式用ユニフォームをデザインしたのは三宅一生である(註10)。さらに、最近の例として、2018年の平昌冬季大会における南北(韓国と北朝鮮)合同選手団の開会式用ユニフォームはアメリカのアウトドア用品メーカーであるザ・ノース・フェイスによって手がけられた(註11)。

3…………到達点／原点としての 1964 年東京大会における 日の丸カラーの開会式用ユニフォーム

直近の夏季オリンピックである 2016 年のリオデジャネイロ大会において、日本選手団は、赤いブレザーと白のスラックスで開会式に臨んだ。日章旗（日の丸）を彷彿とさせる配色である。前章で触れた通り、オリンピックの開会式用ユニフォームに国旗の意匠や国の成り立ちと深い関わりのある色を取り入れている国は多く、これもその一例と言える。

この「日の丸カラー」と言うべき配色の開会式用ユニフォームが 1964 年の東京大会以来中断を差し挟みながらも受け継がれてきたものであることはあまり知られていない。以下、その歴史をたどろう。

(1) 日の丸カラーの開会式用ユニフォームが誕生するまで

日の丸カラーの開会式用ユニフォーム誕生の歴史を明らかにするためには、1952 年のヘルシンキ大会にまでさかのぼらなければならない。日本にとって戦後初参加となるこのオリンピックの開会式用ユニフォームを手がけたのは（註 12）、望月靖之（1910-2003）という人物である。望月は、東京神田で注文紳士服店「日照堂」を営んでおり、戦前から、同じ町内にある日本大学の学生服を仕立てる制服商に指定されていた。当時の日大運動部の活躍は目覚ましく、1949 年の全米水泳選手権で世界記録を打ち立て「フジヤマのトビウオ（Flying Fish of Fujiyama）」と呼ばれた古橋廣之進（1928-2009）をはじめとして、様々な競技種目で、学生選手権を制覇しオリンピック出場を果たす選手を輩出していた。スポーツを愛してやまない望月は、復興の途上で食べることもままならなかった彼らを金銭的援助も含めて支え、「日照堂のオヤジさん」として非常に慕われていたという（註 13）。望月がヘルシンキ大会の開会式用ユニフォームの仕事に任された背景には、こうした選手との結びつきがあったようだ（註 14）。ちなみに、この時、100 着を超えるユニフォームを日照堂と分担で仕上げたのは、各大学の制服指定商の集まりである「東京テーラース倶楽部」加盟の洋服店で、ユニフォームの生地を提供したのは、先述の古橋が 1951 年に就職を決めた大同毛織（現ダイドーリミテッド）だった（註 15）。1964 年の東京大会に至るまで、開会式用ユニフォームの仕事は、この「トリオ」（望月靖之、東京テーラース倶楽部を前身とする「ジャパンスポーツウェアクラブ」、大同毛織）によって手がけられることになる（註 16）（Figs.1）。

望月がヘルシンキ大会の開会式用ユニフォームとしてデザインしたのは、紺色のブレザーとグレーのズボンだった（註 17）。望月が繰り返し語っていたところによると、1952 年 7 月、完成したばかりのこのユニフォームを御殿場で結核療養中の秩父宮に披露したことが、その後の彼の仕事の方向性を決定付けた（註 18）。秩父宮は、「望月君これはブレザーではない。単なるユニホームだ。ユニホームとブレザーの違いはどこで解るか」と尋ね、ブレザーの色はそのチームを印象付けるものでなければならないと説いた（註 19）。そして、次のように激励したという。

各国でも日本でも各学校にスクールカラーがあるようにその国々にもカラーがあり例えば欧州一体ではブルーが貴重な色となっている。……又各国には国鳥があり、フランスはにわとり、デンマークはアヒル、中国はクジャク、日本でも国の花は桜、鳥はキジであり、ブレザーにしても日本を表わす色がある筈です。よく日本の歴史を調べて日本の色をブレザーに表わして見てはどうだろう。……服装はその国の文化のバロメーターであり、選ばれた選手が日本の代表だと堂々と闊歩出来る色でありスタイルであるよう勉強して欲しい。(註20)

秩父宮と言えば、スポーツ全般に造詣が深かったことで知られる。おそらく、この言葉は、19世紀前半、ケンブリッジ大学セントジョンズカレッジのボート部がオックスフォード大学との対抗試合においてジャケットの色を彼らのカレッジカラーである燃えるような赤(blazing red)で統一したというブレザー(blazer)の由来を踏まえた指摘だろう。この指摘を受けるまで、望月は、開会式用ユニフォームが日本選手団を世界に印象付ける役割を果たさなければならないということを明確に意識してはいなかったようだ。それだけに、この邂逅の意味は大きく、翌年1月に秩父宮が薨去した後も、開会式のブレザーに「日本の色」を表すことは彼の課題であり続けた。

望月は、「日本の色」を探して、自ら古文書を紐解き、それだけでは飽き足らず、日大図書館長の斎藤敏をはじめとする学者に教えを乞うたり、郷里の鰯沢(現山梨県富士川町)からほど近い身延山久遠寺に大僧正を訪ねたりした。そんな望月にインスピレーションを与えたのは歌舞伎の台詞だった。自伝の一節を引用してみよう。

今日ではニホン或はニッポンと知っているが、過ぐる日、歌舞伎の舞台で役者のセリフの一節に“わがヒノモトの国、と言っていたのを思い出し、そうだ日本のマスコットは桜の花ではない、富士山でもない、「太陽」だ、真赤に燃えた太陽だ、だから我々の先祖は太陽を国旗に取り入れたのだと思う。……重ねて、日本はお日出たい時は赤白を用い赤白の幕を張り、長寿者には男女を問わず赤の帽子にチャンチャンコ、赤の座布団、などを祝いに贈る。赤と白は伝統の色であり、慶賀の色となったものだと想う。(註21)

すなわち、望月は、ただちに日の丸の赤と白を見出したのではなく、「わがヒノモトの国」というフレーズから、まず、日本と太陽の結び付きを思い、さらに、そこからの連想で、日本の国旗が日の丸であることに思い至ったのだった。望月が「日本」という国号のより本質的な部分に注目していたことは興味深い。さらに、望月が紅白を慶事に用いる伝統に言及していたことも見落とされるべきでないだろう。

望月は、早速、次のメルボルン大会(1956年)の開会式用ユニフォームとして赤いブレザ

一を提案したが、JOC（日本オリンピック委員会）はこれを認めなかった（註 22）。結局、前回と同じ紺色のブレザーに落ち着き、望月は、せめてもの抵抗として、ブレザーの襟を赤白二色のテープで縁取ることにした（註 23）。この意匠は秩父宮記念スポーツ博物館が所蔵するブレザーの実物で確認することができる。是が非でも「日本の色」の開会式用ユニフォームを実現させたい望月は、1960年のローマ大会では、前回の反省を踏まえて、襟に白い縁取りのある赤いブレザーと襟に赤い縁取りのある白いブレザーの二案を JOC に提出した（註 24）。いずれも、下に合わせるのは白のスラックス。赤は「日本人には似合いそうもない」ということで、選ばれたのは後者だった（註 25）。しかし、望月は、白の上下でローマ大会の開会式に臨む日本選手団の姿を目にした時、やはりブレザーの色は赤でなければならないとの思いを新たにしたという。白はスタジアムを埋め尽くす観客のシャツにも多い色で、日本選手団を世界に印象付けるには十分な効果を発揮しなかったからだ。入場行進の映像では、選手たちはかなり接近しないと、ブレザーの襟に赤い縁取りがあることは分からず、その点でも、望月の見出した「日本の色」が実現できているとは言えなかった（註 26）。4年後の東京大会こそは「日本の色」の開会式用ユニフォームをと、望月は、ローマ大会終了直後から、赤い生地の研究に邁進した。理想の赤い生地を探して「JOC オフィシャルテイラー」として欧米 18 カ国を歴訪したり（註 27）、イタリア選手団の開会式用ユニフォームのデザイナーであるロベルト・アレーナに希望を伝えて生地サンプルを送ってもらったり（註 28）、東京大会の国旗担当職員である吹浦忠正のもとを訪れ日の丸の赤について尋ねたり（註 29）、ありとあらゆる手を尽くしたようだ。数ある赤の中から黄みの強い鮮やかな赤を選んだ後も、思い通りの色を出すことは難しく、大同毛織は 3000 点のマス見本を試織したという（註 30）。

1964年2月3日に開かれた JOC の第 1 回服装小委員会は、賛成多数で、望月靖之がデザインした赤いブレザーと白のスラックス（女子はアコーディオンプリーツのスカート）を東京大会の開会式用ユニフォームとして採用することを決定した（註 31）。大同毛織とともに研究に研究を重ねて仕上げた朱色のマットウースを使った試作品は、服装小委員会の委員たちの間でなかなか好評で、ねぎらいの言葉をかける者もあり、反対を覚悟していた望月はかえって拍子抜けしてしまったと回想している（註 32）。

こうして、日の丸カラーの開会式用ユニフォームは誕生した。それは、1952年7月の秩父宮との邂逅に始まる、望月靖之の「日本の色」の開会式用ユニフォームをめぐる長い探求と折衝の一つの到達点であった。

念のため強調しておくが、既に別の機会に明らかにした通り、「VAN」の石津謙介 [1911-2005] が東京五輪の赤いブレザーをデザインしたというのは、1980年代頃から何の裏付けもないまま人口に膾炙してきた俗説である（註 33）。石津が考えた原案を望月が形にしたとする折衷的な説も含めて、この開会式用ユニフォームが誕生する過程で石津が何らかの重要な役割を果たしたということを裏付ける史料や証言は見いだせない。それどころか、石津を含むアイビーブームの立役者たちがリアルタイムでこのユニフォームを酷評していたこ

とを踏まえるなら、そうした役割は果たしていなかったと結論付けるのが妥当だろう(註34)。一方、石津は、1964年の東京大会において、森英恵や芦田淳らとともに、審判、通訳、会場整理など大会運営に欠かせない競技役員用ユニフォームのデザインチームに名を連ねており(註35)、先述した俗説の流布の一因として、開会式用ユニフォームと競技役員用ユニフォームの混同や史料の誤読があったのではないかと推測される。

(2) 日の丸カラーの継承

日の丸カラーの開会式用ユニフォームは、1964年の東京大会から1988年のソウル大会まで、全6大会(冬季オリンピックも含めると全11大会(註36))を通じて、オリンピック日本代表選手団の正装として受け継がれた。JOCの申し合わせでそうすることが決まっていたからである(註37)。しかし、受け継がれたと言っても、毎回同じデザインの繰り返しだったわけではない。1968年のメキシコ大会で膝上2センチのミニスカートが採用されたのをはじめとして(註38)、赤と白の上下という制約の中で、その時々を流行を取り入れた様々なデザインが試みられた。デザインは、ある時期まで望月が手がけ、その後、過去にJOCとの取引実績がある洋服店や百貨店を指名して行う指名入札制へと移行したようだ(註39)。JOCでは、ソウル大会の前後から、先述の申し合わせの見直しが検討されており(註40)、1992年のバルセロナ大会では、同年3月17日の公聴会で「日本代表選手団の公式服装は、日本を代表するデザイナーに依頼した方がよい」との意見が多数を占めたことから、ユニフォームの配色を含むデザインの全てを森英恵に一任することとなった(註41)。一任する以上、開会式用ユニフォームは赤と白の上下でなければならないという縛りも撤廃されたわけだが、結局、森が手がけたのは、かつてないほどに日の丸を意識したデザインだった。白を基調として、ポロシャツの襟、帽子、ポケットチーフ、入場行進で女子選手たちが斜掛けにしていた丸いポシェットなどに赤が配され、ブレザーの背中には、「JAPAN」というロゴの入った赤く大きな正円の意匠が見られる。このデザインをめぐって、森は、「イメージは『日の丸』。私自身、日の丸が大好きです。ピュアでシンプルで、デザインとしてのバランスもパーフェクトだと思います」と語っていた(註42)。1996年のアトランタ大会では、芦田淳によって、赤いブレザーにライトグレーのストラックス(女子はタイトスカート)がデザインされた(註43)(Fig.2)。ブレザーのインナーは青みがかったライトグレーのシャツ。ネクタイは赤と白の太い横縞である。配色だけを見ると、日の丸カラーの開会式用ユニフォームとは言えないが、この青みがかったライトグレーは「爽やかにのぼる太陽」を包む「朝もや」の表現であり(註44)、芦田自らがインタビューにそう答えていたように、インスピレーションの源は「やはり日の丸」だった(註45)。だからこそ、ブレザーの色として赤以外の選択肢はありえなかったという。ちなみに、芦田もまた、望月と同じように、ブレザーを思い描いた通りの赤にすることにこだわり、「何十色の中から選んだトマトに近い明るいオリジナル色になるよう」生地を二度染めしたという(註46)。これら二大会の開会式用ユニフォームは、日本を象徴するものとして日の丸を表現するという基本路線を受け継ぎながら、赤

と白の上下という制約に縛られることなく、さらにそれを発展させたデザインと言えるだろう。

ここまでが、1964年の東京大会を原点としてたどることのできる日の丸カラーの開会式用ユニフォームの一つの系譜である。この系譜は、2000年のシドニー大会以降しばらくの間中断するが、2012年のロンドン大会における原点回帰とその後の展開については本稿の最後の章で詳しく触れることにしたい。

4………模索された新しい開会式用ユニフォームの形

日の丸カラーの開会式用ユニフォームの系譜が中断したということは、すなわち、それまでとは異なる新しい開会式用ユニフォームの形が模索されるようになったということだ。それはどのようなものであったか。シドニー（2000年）、アテネ（2004年）、北京（2008年）の3大会について見てみよう。

(1) 視覚的インパクトが重視された2000年シドニー大会

2000年のシドニー大会の開会式用ユニフォームと言えば、色鮮やかなレインボーカラーのマントが酷評を浴びたことでよく知られているが（註47）、そこでは、従来の日の丸カラーとは全く別のアプローチが試みられていた。

その意図は、1998年の長野冬季大会にまでさかのぼることではっきりと浮かび上がってくる。長野大会の開会式用ユニフォームは、NUC（日本ユニフォームセンター）という公益財団法人によってデザインされた。冬季オリンピックにふさわしく、「ホワイトグラデーション（雪と氷のグラデーション）」というテーマのもと、全体は白とライトグレーでまとめられ、アクセントとして、赤、紫、青、オレンジ、緑、黄色のマフラーと手袋が取り入れられた（註48）。この6色は、「スノーフラワー」の愛称で親しまれた長野大会公式エンブレムの6枚の花弁の色と同じである。NUCの機関誌『ザ・ユニフォーム』によると、このユニフォームは、以下に引用する通り、テレビ画面に映し出される瞬間のインパクトを重視してデザインされた。

開会式における選手団入場のシーンにおいては誇りを持って着用する日本代表選手団の集団美は、観客はもとより国際衛星中継における画像を通じて全世界の人々にも感動と期待を与える。このように、運営演出上、大きな役割を担う公式服装の決定については、その効果を十分に発揮できるよう配慮した。（註49）

入場行進の映像を確認すると、6列縦隊で行進する選手たちのマフラーと手袋の色が列ごとに違っており、遠景からは虹のようにも見える（註50）。これが「日本代表選手団の集団美」を発揮するために考えられた演出なのだろう。

シドニー大会の開会式用ユニフォームをデザインしたのもNUCだった（註51）。『ザ・ユニフォーム』の報告には、「行進時はあえて色を飛ばして美しい一枚の絵画に見えるように、

演出上の効果にも配慮した」とあり、長野大会に引き続き、入場行進における開会式用ユニフォームの視覚的インパクトを重視していたことが分かる（註 52）。マントには、レインボーカラーのほかに、オレンジ系のグラデーション、黄緑系のグラデーション、そして青一色という合計 4 種類があり、これは、おそらく、シドニー大会公式エンブレムに表された 3 本のブーメランの色（オレンジ、イエロー、ブルー）を取り入れたものだ（註 53）。入場行進では、配色の異なる 4 種類のマントが互い違いになるように配置されており、長野大会における色違いのマフラーと手袋の配置をより複雑にした色彩の演出と言える（註 54）。

以上のように、シドニー大会の開会式用ユニフォームでは、従来の日の丸カラーとは全く別のアプローチが試みられており、それが日本を象徴するものとしてデザインされることはなかったのである。

ここで、日本選手団にとって、長野大会が自国開催のオリンピックであったのに対し、シドニー大会はそうではなかったということであらためて指摘しておく必要がある。長野大会において、開催国である日本の選手団の開会式用ユニフォームに公式エンブレムの色が取り入れられることにはそれなりの必然性があった。一方、2000 年当時から疑問の声が上がっていたように、シドニー大会でそれを試みても違和感がなかったのは日本ではなくオーストラリア選手団である（註 55）。日本は多くの参加国の中の一つに過ぎなかったのだから。NUC がこの問題にどれほど意識的であったかは分からないが、件のマントは、オリンピックの開会式用ユニフォームはそもそも何を象徴すべきかという問いを投げかけている（註 56）。

(2) 2004 年アテネ大会に見るデザイナーの個性

2004 年のアテネ大会の開会式用ユニフォームは高田賢三によってデザインされた（註 57）。生産は JOC オフィシャルパートナー（当時）のファーストリテイリングが無償で手がけ、デザインの方向性は、ファーストリテイリング社長で選考委員会副委員長を務めた柳井正と高田の話し合いで決定されていった（註 58）。高田は、当初、開会式用ユニフォームのイメージとして「富士山、桜、日の丸」などを思い描いていたが、柳井の強い意向によって、日本文化のステレオタイプが封印されるという経緯もあったようだ（註 59）。

アテネ大会の開会式用ユニフォームをめぐって特筆すべきことは二つある。一つは、「個性と制服の両立」「SHOW YOUR COLORS～あなたらしさを思う存分発揮してください」というコンセプトのもと、合計 9 種類（男子用 4 種、女子用 5 種）のユニフォームがデザインされたことだ。夏季オリンピックの開会式用ユニフォームの上衣はブレザーという暗黙の了解があり、シドニー大会ですら、マントの下には紺色のブレザーとスラックスが着用されていたが（註 60）、アテネ大会では、ブレザータイプの上衣のほかに、ウィンドブレーカーやパーカーが作られ、女子選手用としては、上衣なしの半袖シャツのみというタイプも用意された（註 61）。ユニフォームでありながら、選手一人一人に選択の自由が与えられたのである。もう一つは、高田賢三というデザイナーの個性が非常によく表れたデザインであった

ということだ。高田は、1970年のパリ・デビュー以来、カラフルな配色とプリント柄同士を組み合わせる自由で大胆な感性によって高く評価されてきた（註62）。中でも、芍薬の花の模様は彼が好んで用いてきたものの一つである（註63）。アテネ大会の開会式用ユニフォームには、そうした「賢三らしさ」がそのまま表れていた。9種類とも白を基調にまとめられていたが、「日本伝統の夏の小道具」として取り入れられた団扇と女子選手用の帽子のつばにピンク、黄色、黄緑色の3色が配され、入場行進では、観客席に向かってこの団扇をひらひらと動かすパフォーマンスもあいまって、軽快でカラフルな印象だった。さらに、男子選手用のTシャツや女子選手用のウィンドブレーカー、パーカー、半袖シャツには芍薬の花の模様がプリントされおり、これは、2020年1月現在、オリンピック日本代表選手団の歴代開会式用ユニフォームの中でプリント柄を取り入れた唯一の例となっている。

しかし、オリンピックの開会式用ユニフォームにおいてデザイナーやブランドの個性を表現するということは一考を要する問題である。例えば、ラコステのデザインしたフランス選手団の開会式用ユニフォームの場合、胸にあしらわれたフランス国旗と同じトリコロールの鱈のマークを見て、多くの人々は、それが「ラコステの鱈」だと認識することができる。そして、「ラコステの鱈」がオリンピック特別仕様のトリコロールになっている面白味を共有することができる。「ラコステの鱈」がそれだけ広く知られた意匠だからだ。一方、高田賢三の名前は有名でも、彼がどのようなデザイナーであるかはあまり知られておらず、カラフルな芍薬の花の模様の開会式用ユニフォームを「賢三らしいデザイン」と認識できる人は限られてくる。多くの人にとって、それは、「よく分からないカラフルな花柄」でしかない。こうしたことまで加味して考えると、デザイナーの個性を前面に押し出したアテネ大会の開会式用ユニフォームは、オリンピックという大衆的なイベントにふさわしい表現ではなかったかもしれない。

(3) 2008年北京大会の「武士の勝色」は日の丸カラーに取って代わるか

2008年の北京大会の開会式用ユニフォームを手がけたのはミズノだった（註64）。スポーツ用品メーカーが開会式用ユニフォームを手がける際の特徴として、独自に開発した素材や製法を用いた機能性の重視ということが挙げられるが、北京大会では、 Poloシャツやスラックス（女子はハーフパンツ）の素材として、ミズノとクラレの共同開発による涼感素材「アイスタッチ」が使用された（註65）。濃紺と白の2色ですっきりとまとめられ、これまでに見た2大会と比較して落ち着いた印象である。JOC公式報告書によると、このブレザーの色は、「武士の勝色として古くから縁起の良い色とされてきた深みのある濃紺」という意味付けのもとに選ばれたものであるという（註66）。

色の持つ伝統的な意味を踏まえてそれを取り入れた北京大会の開会式用ユニフォームは、方向性としては、かつての日の丸カラーの路線に近い。しかし、こうした色に込められた意味は、明示的に語られない限りなかなか伝わるものではない。日の丸カラーのように国旗に使用されている色であれば、オリンピックの入場行進では先頭の旗手が国旗を掲げている

ため、一目でそれを取り入れたユニフォームだと分かる。あるいは、「オランダのオレンジ」や「イタリアのブルー」のように、様々な場面で繰り返し登場し、その国にとって特別な意味を持つ色であることが広く知られているなら、あえて由来を語る必要もない。一方、濃紺のブレザーが「武士の勝色」という伝統を踏まえたものであることは、それを見ただけでは誰にも分らない。日本国内においてすら、濃紺にそのような意味があることを知っているという人は少数だろう。どんなに深い意味付けやコンセプトも伝わらなければ存在しないと同じである。それゆえ、色に込められた意味を伝える工夫なしには、「武士の勝色」の濃紺がただちに日の丸カラーに取って代わることはないのである。

5……………日の丸カラーへの回帰

以上のような中断を経て、2012年のロンドン大会において、オリンピック日本代表選手団の開会式用ユニフォームは再び日の丸カラーへと回帰した。2011年3月11日に発生した東日本大震災からの復興を意識した「世界中に日本の元気と底力をアピールするため」の「エネルギッシュなナショナルフラッグカラー」であるという(註67)。特に、日の丸の中に東北6県のシルエットを表したポケットチーフには東北復興への強い願いが込められていた(註68)。高島屋によるデザインである(註69)。もっとも、こうしたデザインの細部に込められた願いは、JOCの広報では全く言及されず、ノンフィクションライターの窪田順生が高島屋の下請けとしてこのユニフォームをデザインした人物を突き止め取材したことで初めて明らかにされた。アテネ大会におけるカラフルな花柄や北京大会における「武士の勝色」の濃紺がそうであったように、意匠が持つ意味は、誰もが一目で分かるようなものを除いて、明示的に語られない限りなかなか伝わらない。そもそも、開会式の映像だけでは、折り畳まれたポケットチーフの意匠がどうなっているかなど知る由もない。だから、意匠自体も意匠の持つ意味も共有されようがなかった。

さらに、2016年のリオデジャネイロ大会でも、再び日の丸カラーの開会式用ユニフォームが登場した(註70)。デザインは前回に引き続き高島屋(註71)。JOC公式報告書では、コンセプトは「情熱～真紅に宿る、太陽の熱量をちからに～」であったと説明されている(註72)。男女ともボトムがスラックスだったのは服装のジェンダーレス化を受けた新しい傾向だが、あえて指摘するなら、赤いブレザーに白のスラックスという組み合わせがかつてのJOCの申し合わせをそのまま再現したようで、同じ日の丸カラーの路線でも、赤と白の上下という制約からもっと自由なデザインであってもいいように思われた。それは既にバルセロナ大会やアトランタ大会において実現されていたことだ。各国選手団の開会式用ユニフォームがカジュアル化にとどまらない多様化を見せている現在だからこそ、デザインの可能性は限りなく広がっているはずである。

そういう意味では、アシックスが手がけた2018年平昌冬季大会の開会式用ユニフォームは、日の丸カラーの定型を脱し、なおかつ、日本を象徴するものとして「太陽」を表現した

興味深いデザインだった。メインカラーは「朝日が昇る力強さをイメージした鮮やかな『サンライズレッド』」(註73)。JOCのプレスリリースではオレンジ色にしか見えなかったが、開会式が行われるスタジアムの強い照明の下では真赤に映えて、綿密な計算のもとに作られたものであることが分かる(註74)(Fig.3)。そして、この「サンライズレッド」のジャケットに、日本を囲む海をイメージした紺色のマフラーやニット帽が組み合わせられていた。赤と白の上下ではない。しかし、望月靖之が歌舞伎の台詞から日本と太陽の結び付きを思い、そこから「日本の色」として日の丸カラーを見出した始まりの歴史を踏まえるなら、このデザインには、同じ発想を受け継いだ開会式用ユニフォームの新しい形を見ることができる。

6…………おわりに

ここまで、オリンピック日本代表選手団の開会式用ユニフォームの歴史を駆け足でたどってきた。今年7月24日には二度目の開催となる東京大会が開幕する。本稿が刊行される頃には、開会式ユニフォームも発表されていることだろう。デザインはプロポーザル方式の公募で決定されるが、JOCが行う公募事業としてはめずらしく「アイテム構成は自由提案」となっており、デザイン上の制約が少ない(註75)。「日本を纏う」「歴史と伝統の継承」などのコンセプトのもと、どのようなデザインが生み出されるだろうか(註76)。前回の東京大会がそうであったように、将来に向けて新しいデザインの可能性を切りひらくような開会式ユニフォームの誕生を期待しつつ、ここで、再び、秩父宮の言葉を引用して本稿を結びたい。

服装はその国の文化のバロメーターであり、選ばれた選手が日本の代表だと堂々と闊歩出来る色でありスタイルであるよう勉強して欲しい。(註77)

[註]

1. オリンピックの開会式で選手団が着用するユニフォームの正式名称としては、「公式服装」や「オフィシャルスポーツウェア」という用語が使われるが、本稿では、一般に馴染みのある「開会式用ユニフォーム」という表現で統一することにした。
2. ステラ・マッカートニーはイギリス選手団の、クリスチャン・ルブタンはキューバ選手団の開会式用ユニフォームを手がけた。Macaela Mackenzie, "The Style Olympics: What the Athletes Will Wear in Rio," Allure, 2 August 2016, <https://www.allure.com/story/olympics-2016-stella-mccartney-ralph-lauren-rio-uniforms> (accessed 8 January 2020).
3. 1992年のアルベールビル大会まで、冬季オリンピックは夏季オリンピックと同じ年に開催されていたが、1994年のリレハンメル大会以降、冬季オリンピックと夏季オリンピックは2年おきに交互に開催されるようになった。
4. 安城寿子「五輪ユニフォーム考：2000年シドニーオリンピックの虹色マントをめぐって」『現代風俗学研究』18号、2018年9月、33-42頁；『1964東京五輪ユニフォームの謎：消された歴史と太陽の赤』(以下『ユニフォームの謎』と略す)、光文社、2019年。
5. この写真は以下のサイトで確認することができる。"In pictures: 1908 London Olympics," BBC

Home, 24 September 2014,

http://www.bbc.co.uk/london/content/image_galleries/olympics_1908_gallery.shtml (accessed 8 January 2020).

6. 五十殿利治 『『巨大な祭典』：オリンピック開会式と芸術』 『現代スポーツ評論』 35号、2016年11月、59-67頁。
7. The Netherlands Olympic Committee (ed), *The Ninth Olympiad: Being the Official Report of the Olympic Games of 1928 Celebrated at Amsterdam, Amsterdam*: J. H. de Bussy Ltd., 1930, p. 165. The Xth Olympiade Committee of the Games of Los Angeles (ed), *Xth Olympiad*, Los Angeles, 1932: Official Report, Los Angeles: Wolfer Printing Company, 1933, p.108.
8. オランダ建国の父であるウィレム1世はオラニエ=ナッサウ家の出身だった。オレンジはオランダ語で「オラニエ」と発音されることから、オラニエ=ナッサウ家では代々オレンジ色を自家の象徴として用いてきた伝統があり、この伝統を踏まえて、オランダでは、現在でも、オレンジ色が国を象徴する色として用いられる。
9. 以下の記事には、日本とギリシャの開会式用ユニフォーム決定のプロセスの簡単な比較が見られる。「アテネ2004訪問 記録より」『ザ・ユニフォーム』2003年9月号、4-5頁。
10. 三宅一生、青木保監修、国立新美術館、公益財団法人三宅一生デザイン文化財団、株式会社求龍堂編『Miyake Issey展：三宅一生の仕事』求龍堂、2016年、240頁。
11. Yoon Hyung-jun, "Uniforms for Pyeongchang Olympics Unveiled," *Chosun Ilbo*, 1 November 2017, http://english.chosun.com/site/data/html_dir/2017/11/01/2017110101561.html (accessed 8 January 2020).
12. 第二次世界大戦後初めて開催されたオリンピックは1948年のロンドン大会だが、敗戦国である日本はIOC（国際オリンピック委員会）への再加盟を認められず、参加することができなかった。
13. 「いずみ」『読売新聞』1949年8月23日、2面。古橋廣之進「終戦直後に出逢った日照堂のオヤジさん」望月靖之『ペタルを踏んだタイヤの跡』（以下『ペタル』と略す）所収、栄光出版社、1985年、12-13頁。
14. 日大水泳部出身で日本水泳連盟名誉顧問の林利博氏談。詳細は、安城『ユニフォームの謎』26-30頁参照。
15. 望月『ペタル』103-104頁。株式会社ダイドーリミテッド編『Daidoh 130年：1879~2009』（非売品）、2009年、56頁。
16. 『ペタル』104頁。株式会社ダイドーリミテッド編『Daidoh 130年：1879~2009』56-57頁。日本体育協会編『オリンピック競技大会報告書第18回（1964年東京）』1965年、494頁。
17. 『ペタル』105頁。望月の自伝にはヘルシンキ大会の開会式用ユニフォームを身に着けた秩父宮の白黒写真が掲載されているが、管見の限りで、このユニフォームのカラー写真を掲載したものは見当たらず、博物館等でユニフォームの実物を所蔵しているところもないようである。ヘルシンキ大会に出場した日大出身の元水泳選手たちに聞き込み調査を行った際、「処分してしまった」「数年前までは手元にあったが、どこに行ったかもう分からない」等の声も聞かれたことから、関係者の協力のもと、重要な史料であるこのユニフォームを収集保存することは急務であるように思われる。
18. 望月の自伝『ペタル』の他に、望月の発言や回想に基づく記事としては、以下のものを挙げることができる。「ローマ五輪のブレザー：清潔かあなたはどちらを?」『東京中日新聞』1960年3月26日、9面。「五輪服装史アテネから東京まで：桜舞台を飾る“裏方”さん達」『日織ジャーナル』1964年10月号、67-69頁。「ブレザー物語」『装苑』1964年10月号、235-237頁。「秩父宮殿下の御言葉とアマチュア・スポーツの精神に徹して：望月靖之委員長挨拶要旨」『洋装タイムス』1964年10月1日号、掲載頁不明。「五輪ファッション考」『読売新聞』1988年9月24日、34面。「オリンピック日本選手団のブレザーの由来」『体協時報』1988年11月号（以下記事タイトルは省略する）、51-53頁。これらの史料のうち、『洋装タイムス』は公立私立の図書館に所蔵がなく、株式会社ダイドーリミテッドが記事の切り抜きが貼られたスクラップブックを所蔵しているのみである。なお、

やや不鮮明ではあるが、この『洋装タイムス』の記事は拙著『ユニフォームの謎』の巻末の画像でも確認することができる。安城『ユニフォームの謎』274頁。

19. 望月『ペタル』106頁。
20. 望月『ペタル』106-107頁。
21. 望月『ペタル』168-169頁。
22. 望月『ペタル』167頁。『体協時報』1988年11月号、51-53頁:52頁。
23. 『体協時報』1988年11月号、51-53頁:52頁。
24. 「白の上下に：五輪ブレザー」『朝日新聞』1960年3月19日、9面。「ローマ五輪のブレザー：清潔か情熱かあなたはどちらを?」『東京中日新聞』1960年3月26日、9面。
25. 「白の上下に：五輪ブレザー」『朝日新聞』1960年3月19日、9面。望月の回想によると、「男が赤を着るなんておかしい」との反対意見もあったという。望月『ペタル』130頁。
26. ローマ大会の開会式に臨む日本選手団の様子は以下の動画で確認することができる。「[昭和35年9月] 中日ニュース No.346_2『ローマ五輪華やかに開幕』」中日映画社公式 Youtube チャンネル、2015年11月23日公開、<https://www.youtube.com/watch?v=vFfsjRvlzpE> (2020年1月8日閲覧)。
27. 望月の自伝には、訪問先のロンドン、ストックホルム、スイスのユングフラウヨッホ、メキシコシティで撮影された望月の写真が収められている。望月『ペタル』137、142、149頁。また、山梨県富士川町の富士川町スポーツミュージアムには、望月が「JOC オフィシャルテイラー」に任じられていたことを裏付ける通行証が所蔵されている。
28. 望月『ペタル』172頁。八木祐四郎「先達人としての私の親父（常に道を与えてくれた人）」望月『ペタル』所収、14-17頁。望月とアレーナの交流を裏付ける同時代史料としては、小野稔「ブレザーコートを競う日伊仕立師の友情」『週刊現代』1960年9月25日、36-37頁がある。
29. 吹浦忠正氏談。詳細は安城『ユニフォームの謎』47-51頁を参照。
30. 「五輪服装史アテネから東京まで：桜舞台を飾る“裏方さん達”」『日織ジャーナル』1964年10月号、67-69頁：68頁。
31. 日本体育協会編『オリンピック競技大会報告書第18回（1964年東京）』1965年、493頁。
32. 望月『ペタル』173頁。また、望月の自伝の巻頭には、服装小委員会委員長を務めた青木半治がこの時のことを回想した文章が収められており、その内容は、『体協時報』1988年11月号に掲載された望月の回想とも一致している。青木半治「真紅のブレイザーコート」望月『ペタル』所収、10-11頁。『体協時報』1988年11月号、51-53頁：52頁。
33. 詳細は安城『ユニフォームの謎』第2章から第4章を参照。
34. 石津謙介「貧乏人の注文服：東京オリンピックのブレザーコート」『読売新聞』1964年6月7日、19面。伊藤紫朗「替え上衣：あなたのためのストックブレザー」『平凡パンチ』1964年9月14日号、76-77頁。くろすとしゆき「あいびいあらかると」『メンズクラブ』1964年11月号、29頁。
35. オリンピック東京大会組織委員会編『オリンピック東京大会資料集1』1965年、76頁。
36. 東京大会（1964年）、グルノーブル冬季大会（1968年）、メキシコ大会（1968年）、札幌冬季大会（1972年）、ミュンヘン大会（1972年）、インスブルック冬季大会（1976年）、モントリオール大会（1976年）、レークプラシッド冬季大会（1980年）、サラエヴォ冬季大会（1984年）、ロスアンゼルス大会（1984年）、ソウル大会（1988年）の11大会。
37. 「五輪日本選手団の服装：色など決める」『読売新聞』1964年3月3日、9面。「これが日本選手の制服」『読売新聞』1964年3月12日、15面。日本体育協会編『オリンピック競技大会報告書第23回』1984年、99頁；『オリンピック競技大会報告書第24回』1989年、113頁。
38. 「“日の丸”の赤と白：メキシコ五輪のユニホーム」『読売新聞』1968年6月27日、10面。
39. 開会式用ユニフォームがどのような選考を経て誰によってデザインおよび生産されたかはJOC公式報告書に常に明記されてきたわけではないため、明らかにできないことも多い。確かなこととして分かっているのは、1968年のメキシコ大会までは望月が継続的にデザインを手がけていたが、

その後、遅くとも 1984 年のロサンゼルス大会までに指名入札制が導入されたということだけである。日本体育協会編『オリンピック競技大会報告書第 23 回』99 頁;『オリンピック競技大会報告書第 24 回』113 頁。

40. 日本体育協会編『オリンピック競技大会報告書第 24 回』113 頁。
41. 日本オリンピック委員会編『オリンピック競技大会報告書第 25 回』1993 年、82 頁。
42. 同前、82-83 頁。
43. 日本オリンピック委員会編『オリンピック競技大会報告書第 26 回』1997 年、165 頁。なお、アトランタ大会の JOC 公式報告書にはデザイナーの名前が明記されておらず、以下の新聞記事がその裏付けとなる。「五輪へ燃えるユニホーム：アトランタ・日本選手団の公式服装決まる」『読売新聞』1996 年 5 月 9 日、1 面。
44. 日本オリンピック委員会編『オリンピック競技大会報告書第 26 回』165 頁。
45. 「アトランタ五輪の日本選手団ユニホームのデザイナー芦田淳さん」『読売新聞』1996 年 5 月 9 日、17 面。
46. 同前。
47. 「とっぴマントに賛否：『全員ゲイ関係者?』の声」『夕刊フジ』2000 年 9 月 17 日、3 面。「日本虹色マント：仰天開会式『色男色女』の大作」『日刊スポーツ』2000 年 9 月 16 日、3 面。
48. 「特集第 18 回オリンピック冬季競技大会（長野 1998 年）日本代表選手団公式服装」『ザ・ユニフォーム』1997 年 10 月 11 月合併号、4-10 頁 5 頁。
49. 同前、4-5 頁。
50. 長野大会の開会式に臨む日本選手団の様子は国立国会図書館に所蔵されている以下の映像資料で確認することができる。「長野オリンピック感動の 16 日間第 18 回オリンピック冬季競技大会 NAOC 記録ビデオ」（長野オリンピック冬季競技大会組織委員会企画、1998 年）
51. シドニー大会のレインボーカラーのマントは森英恵によるデザインと言われることがあるが、正確には、森英恵を委員長とする選考委員会が NUC のデザインしたものを監修した。「特集第 27 回オリンピック競技大会（2000/シドニー）日本代表選手団公式服装」『ザ・ユニフォーム』2000 年 7 月号、3-5 頁 3 頁。
52. 「特集シドニーオリンピック報告」『ザ・ユニフォーム』2000 年 9 月 10 月合併号、2-5 頁 2 頁。
53. 『ザ・ユニフォーム』では、この 3 色について、「シドニーオリンピックのテーマカラーである 3 色をポイント的に使用」と説明されている。「特集第 27 回オリンピック競技大会（2000/シドニー）日本代表選手団公式服装」『ザ・ユニフォーム』2000 年 7 月号、3-5 頁 4 頁。
54. シドニー大会の開会式に臨む日本選手団の様子は国立国会図書館に所蔵されている以下の映像資料で確認することができる。「シドニーオリンピック 2000 ハイライト」（IOC 公認オリンピックビデオ・シリーズ、ワーナー・ヴィジョン・ジャパン、2000 年）
55. 以下の新聞記事では、このマントがシドニー大会のテーマである「環境保護とエコロジー」を意識してデザインされたというニュースを受けて、ファッションジャーナリストの福田京子が「それはオーストラリアがやることなのでは」と苦言を呈している。「日本虹色マント：仰天開会式『色男色女』の大作」『日刊スポーツ』2000 年 9 月 16 日、3 面。
56. 一方、レインボーカラーは LGBT の象徴であることから、2000 年当時、シドニーでは、日本選手団を「全員ゲイか?」と揶揄する声が上がっていたと言われる。このマントは、ある意匠が何かを象徴するものである場合、製作者の意図が別のところにあったとしても、そこに象徴的な意味を読み込まれることから自由たりえないことを示す好例でもある。「とっぴマントに賛否『全員ゲイ関係者?』の声」『夕刊フジ』2000 年 9 月 17 日、3 面。
57. 日本オリンピック委員会編『第 28 回オリンピック競技大会（2004/アテネ）日本代表選手団報告書』2004 年、158 頁。
58. 高田賢三「私の履歴書 29」『日本経済新聞社』2016 年 12 月 30 日、32 面。
59. 同前。

60. 「特集第 27 回オリンピック競技大会（2000／シドニー）日本代表選手団公式服装」『ザ・ユニフォーム』2000 年 7 月号、3 頁。「特集シドニーオリンピック報告」『ザ・ユニフォーム』2000 年 9 月 10 月合併号、2 頁。
61. 日本オリンピック委員会編『第 28 回オリンピック競技大会（2004／アテネ）日本代表選手団報告書』158 頁。
62. 例えば、フランスのファッション雑誌『エル』は、1971 年 3 月 22 日号で、注目の若手デザイナーの一人として高田を取り上げ、「彼は、色彩とプリントの非常に大胆な組み合わせの中に浮世絵師の洗練された感性を秘めている」と書いている。Claude Berthod, "La mode junior en pleine croissance," *Elle*, 22 mars 1971, pp.98-105: p.98.
63. *Ibid*, p.102.
64. 日本オリンピック委員会編『第 29 回オリンピック競技大会（2008／北京）日本代表選手団報告書』2008 年、172 頁。65.同前。
66. 同前。
67. 同前。
68. 窪田順生「オリンピックの制服デザイナーが語る、ハンカチへの想い」IT media ビジネスオンライン、2012 年 7 月 31 日公開、<https://www.itmedia.co.jp/makoto/articles/1207/31/news017.html>（2020 年 1 月 8 日閲覧）。
69. 日本オリンピック委員会編『第 30 回オリンピック競技大会（2012／ロンドン）日本代表選手団報告書』2013 年、176 頁。
70. 日本オリンピック委員会編『第 31 回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）日本代表選手団報告書』2017 年、202 頁。
71. 同前。
72. 同前。
73. 「平昌 2018 日本代表選手団のオフィシャルスポーツウェアを発表」公益財団法人日本オリンピック委員会公式ホームページ、2017 年 11 月 13 日、<https://www.joc.or.jp/games/olympic/pyeongchang/news/detail.html?id=9468>（2020 年 1 月 8 日閲覧）。
74. 同前。
75. 2020 年東京大会の開会式用ユニフォームはプロポーザル方式の公募で選ばれることになっているが、JOC が定める「公募要領一式」の中の「作製要項」には「開会式服」の「アイテム構成は自由提案」とある。「第 32 回オリンピック競技大会（2020／東京）日本代表選手団『公式服装作製』事業について」公益財団法人日本オリンピック委員会公式ホームページ、2019 年 4 月 15 日、<https://www.joc.or.jp/sp/news/detail.html?id=11368>（2020 年 1 月 8 日閲覧）。
76. JOC は、2020 年東京大会の「日本代表選手団公式服装コンセプト」として、「ニッポンを纏う」を掲げ、さらにその下に「東京 2020 大会の価値の発信」「歴史と伝統の継承」「国民との一体感」という 3 つのコンセプトを挙げている。前注の URL でダウンロードできる「公募要領一式」の中の「公募要領」を参照。
77. 望月『ペタル』107 頁。

安城寿子（あんじょうひさこ）

1977 年東京生まれ。学習院大学文学部哲学科卒。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻博士後期課程満期退学。博士(学術)。JOA(日本オリンピック・アカデミー) 会員。著書に『1964 東京五輪ユニフォームの謎：消された歴史と太陽の赤』（光文社、2019 年）、共著に *Global Dressing Bodies: The Political Power of Dress in World History* (Routledge, 2019) や *Textile Modern/Textile*

Modernism (Böhlau, 2019) などがある

(肩書は掲載時当時のものです)